

「これから手帳」 ～いつまでも自分らしく～

「これから手帳」は、高齢者が自分らしく暮らし続けることのサポートを目的に、専門職間の連携ツールとして、医療・介護の専門職等の団体「自立支援多職種ネットワーク推進会議」により開発された手帳です。地域の専門職や県内の老人クラブ等での活用が広がっています。



「これから手帳」を活用し
住民・利用者の自立を高めましょう!
説明会のご希望は、事務局まで♪



本会非公式フクロウの^{だいふく}大福ちゃん
自立の木で暮らしながら、これから手帳を
広める旅をしています。

CONTENTS

- 巻頭言 P02
- 活動報告 庄原市地域包括支援センター P03
- 学びのページ 広島市清和・日浦地域包括支援センター 永見 悠騎さん … P04 ～ P05
- 私のまわりの輝きさん 漫画家 たかの 歩さん P06 ～ P07
- 研修報告「リーダー研修」..... P08 ～ P09



広島県地域包括・在宅介護支援センター協議会 副会長 元廣 緑 (広島市口田地域包括支援センター)

皆様、新しい年が始まりあっという間に1か月が過ぎていきました。まだまだ感染症対策をしながらの業務に苦勞されていることと思います。私も皆様同様、地域包括支援センターで業務をする中、年間スケジュールの半数以上が変更を余儀なくされる日々を過ごしております。

私は、平成18年4月から広島市口田地域包括支援センターに就職し、今日まで主任介護支援専門員としてまたセンター長として業務してきました。法人の前理事長が当協議会の副会長であったこともあり入職当初より協議会の委員として関わらせていただきました。頼まれたら断れない性格のため現在の状況に至っております。副会長として力不足を実感しております。

担当のセンターでは「地域のことは地域の力で!」を合言葉に地域包括ケアシステムの構築・深化を進めてまいりました。当地域は医療・介護事業所に恵まれており、地域力も高い地域だと感じております。住民とともに「まちづくり」を見直し、これからもこの町に暮らしたいと感じるには何が必要か語り合いはぐくみ合ってきました。

しかし昨年からは今までの取り組みを変更しなければいけない多くの場面にぶつかっています。地域でクラスターが発生したこともあり、住民は人が集まることにとても用心深くなっています。地域活動の多くが中止になり、住民同士の交流が極端に減ってしまいました。専門職間ではだいぶ慣れてきたリモートでの会議や研修会も、相手が住民となるとなかなかそうはいきません。防災対策で携帯電話やPCにデータ登録をすることに於いても苦勞しています。

新しい生活様式の中で「地域共生社会」を地域の実情に合わせて深めるために地域の構成員である多世代多職種のすべての人が有機的につながり、小さな網の目のネットワークができることを望んでいます。できることから前に進むために医療・介護連携だけではない連携に向け、金融機関をはじめとした地域企業との連携策を模索中です。地域には特別支援学校がある関係からか、障がい者の方も多く生活をしておられ、作業所も他地域に比べ充実しています。お互いがお互いの仕事を知る事が連携の第一歩だと常々感じています。お互いを知り一緒に何ができるかを考え試してみる。一進一退しながら重層的な網の目が作られるものと思います。

これからも地域住民が中心になってまちづくりが進んでいくことを願い、地域の人たちとワイワイガヤガヤ楽しみながらの地域の一員として業務をしていこうと思います。とりとめのない文章を最後までお読みいただきありがとうございました。これからもよろしく願いいたします。

庄原市地域包括支援センター

● 庄原市の概要

庄原市は、広島県の北東部に位置し、面積は1,246.49km²で広島県の約14%を占めています。皆さんが想像される通り、水と緑に恵まれた豊かな自然環境で、中山間地域ならではの心安らぐ里山景観を生み出しています。人口は緩やかな減少傾向で、令和3年12月末現在33,352人、高齢化率43.9%です。また高齢者のうち後期高齢者が占める割合は57.3%で、独居や高齢者のみの世帯が増加しています。

● 地域包括支援センターについて

庄原市地域包括支援センターは、庄原市が直営で運営しています。市直営の強みとして、情報を集約しやすく、医療・介護等の専門職や、自治振興区・民生委員等の地域団体や関係者と連携しやすいこと等が挙げられます。

地域ケア会議のひとつである地域ケア推進ワーキング会議で、介護が不要な高齢者は「介護が必要になった時、どのような支援を受けたいか」を考えること、また将来高齢者となる私たち世代も「我が事」として考える機会を設ける必要があること、が課題として挙がりました。そこで、庄原版終活ノート「いきかたノート」を作成しました。このノートをきっかけに、自分らしく生きるためにどうするか考え、自分の思いを家族や大切な人と共有してもらうよう啓発しています。

庄原市地域包括支援センターの基幹型は1か所ですが、7つの日常生活圏域ごとにサブセンターがあり、基幹包括が庄原圏域のサブセンター機能を有しています。庄原圏域以外のサブセンターの保健師は、包括業務と市の保健業務を兼務しています。社会福祉士は基幹包括におり、全市的に高齢者の権利擁護の業務に対応しています。また、ランチ機能として市内11か所に老人介護支援センターが設置されており、総合相談の対応等で連携を図っています。

毎月、包括担当者会議を開催し、圏域の課題や取り組み状況等を共有しています。また、地域課題を協議する場である協議体や、個々の生活状況を把握されている民生委員・児童委員協議会定例会に出席するなど、地域の状況を把握するようにしています。

個別ケア会議のテーマとして多く挙がるのが、認知症の方や家族の支援についてです。認知症になっても住みやすい地域づくりについて圏域ケア会議や市全体の地域ケア推進ワーキング会議、協議体等で検討しています。その中で検討したことが少しずつでも実現することを目指すとともに、今後も住民の方や関係機関と顔の見える相談しやすい関係を築いていきたいと思っています。

9月は「世界アルツハイマー月間」

**認知症になっても
笑顔で暮らせる
庄原市を
めざそう!**



認知症になっても笑顔で暮らせる
庄原市をめざそう!

**ご相談は、
庄原市地域包括
支援センターへ**
いろいろご
☎ 0824-73-1165

～このマグネットステッカーを貼った庄原市の公用車で市内を回っています～

広島市清和・日浦地域包括支援センター 永見 悠騎

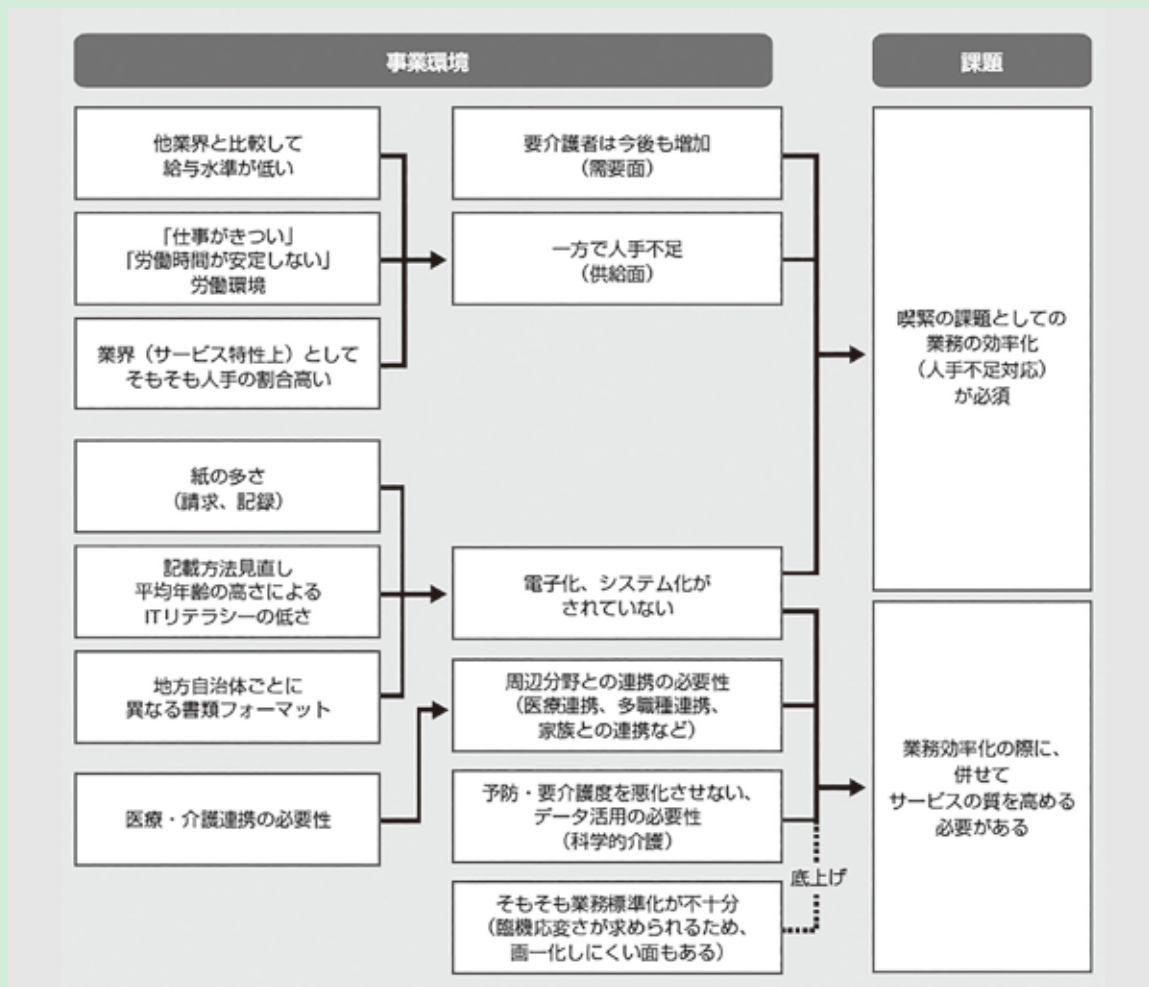
福祉分野DX(デジタルトランスフォーメーション)の可能性

介護サービス分野におけるDX

今後、高齢者が増加するとともに、生産年齢人口が減少することが見込まれる中で、介護従事者の負担を軽減し、持続可能な介護提供体制を構築することは必要不可欠です。そして、このような状況を打開するための手段として、DXの推進が介護の領域でも求められます。しかし、介護分野では対面でのサービス提供が前提となることから、ほかの業界のようにすべてをデジタル化すればよいというものではありません。

介護サービスにおけるDXのゴールは、「間接的業務の効率化」と「サービスの質の向上」の2つに大別されます。DXは、利用者に直接触れるような介護サービスの本質的な業務（直接的なケア）を省力化するものではありません。直接的なケア以外の記録の作成や情報伝達、人材育成などの周辺業務を、デジタル技術を活用して効率化することを主に目指しています。その上で、直接的なケアにかけられる時間を確保して、より質の高いサービスを提供することが求められます。さらには、事業所という単位を超えて、「高齢者が住み慣れた地域で最期までよりよく生きる」という地域包括ケアの概念を実現するという上位目標として位置付ける必要があります。このことに鑑み、デジタル化すべき業務とそうでない業務を切り分けつつ、全体最適を図ることがDX推進のポイントと考えられます。

■ 事業環境と生産性向上に向けた課題



なお、DXを図るといってもその内容は多岐にわたります。

介護分野においては、ほかの業界では当たり前となっているような最初のステップであるデジタル化の浸透もまだ十分とはいえません。たとえば、まだまだ手書きの記録が多く、行政への提出書類も書面での提出が求められるケースが大半を占めています。加えて、サービスの提供中に書いた手書きメモの内容を、後ほどパソコンで打ち込むといった二重作業も発生しています。このほかにも、事業所内部の業務系システムと保険請求系のシステムが分かれているなどの理由から、一つのシステムに入力した内容を、画面を見ながら別のシステムに二重入力しているケースも珍しくなく、そうした例は枚挙に暇がありません。

タブレット型端末を使い、音声入力や簡単なタッチ操作で入力ができるようになれば、こうした記録や書式の作成に関する非効率な時間を大幅に削減できますし将来的には、機械学習における情報の蓄積や、専門用語を含めた辞書機能といった技術的な壁が突破された上でセンサーなどを活用すれば、サービスを提供している間に自動的に記録が作られていくといったことも可能になるでしょう。

また、事業所内でのコミュニケーションについても、チャットツールやシステム上の掲示板などをうまく活用すれば、伝達漏れやミスなどを減らすとともに、作業を中断したり、何度も電話をかけたといった時間を削減することができます。

紙文化からICT活用へと変革することで、業務の効率化を図ることは喫緊の課題ですが、今後はそれだけにとどまらず、そこで入力したデータを地域で共有して地域包括ケアに活かすといったことも求められます。

■ 介護 DX 取り組み事例概要

主な 利用サービス	企業	概要
施設系介護事業所 特別看護老人ホーム、 有料老人ホームなど	パナソニック	センサーとAIを組み合わせて、施設内の要介護者の動きからニーズを先回りしてサービスを提供
	パラマウントベッド	睡眠、排泄、離床、バイタルなど、施設内で取得する要介護者のデータを連結し、施設内で状態者の現状を可視化。適切なタイミング・方法で職員が介助することをサポート
	SOMPOケア	センサー、画像認識技術、5G（第5世代移動通信システム）の組み合わせにより、要介護者の記録や電話といった間接的業務を効率化
	（株）アイオロス・ロボティクス	AI搭載ロボットにより、施設内での運搬業務などを代替
	CYBER DYNE、ATOUN、イノブイス、ジェイテクトなど	パワーアシストスーツはいずれも小型化・軽量化により、介護施設での導入を促進
居宅系介護事業所 訪問介護、通所介護、 居宅介護支援など	CDI	過去の膨大な知見を学習させてAIに利用者が解決すべき課題の選択肢を提示させ、ケアマネジャーのケアプラン作成業務を支援
	パナソニック カーエレクトロニクス	通所介護などにおける送迎・移動の計画作成・実施記録を自動化
	カナミックネットワーク	訪問介護向けに訪問ルートを地図上に表示することで、管理者による適正な訪問計画の作成を支援
	CIC	AIを活用して利用者の満足度とケアの受け入れ人数を最大化する、訪問介護ヘルパーの最適配置を実現
地域包括 市町村・ 都道府県など	CDI	過去の膨大な知見を学習させてAIに利用者が解決すべき課題の選択肢を提示させ、ケアマネジャーのケアプラン作成業務を支援
	カイトク	介護施設が介護人材をスポット活用するためのワーキングシェアサービス
	NEC	コミュニケーション・ロボットの活用により、専門職・家族・自治体が要介護者を見守り
	エクスワイヤーズ	AIを用いて「科学的根拠にもとづくケア」を実現し、国や自治体の社会保険費を削減

私のまわりの輝きさん

高野さんは、自身の介護職として働いていた経験・実話をもとに、介護の世界を描く漫画家です。「さくらと介護とオニオカメ!」という作品は、実話から生まれた「介護」の世界をリアルに描くことで話題になりました。介護現場を知っている人、知らない人も毎作涙を流さずにはられません!
～あらすじ～

介護施設の認知病棟で働き始めた鬼岡 明 (おにおか めい) は、熊本リーダーとともに、理想と実態の渦に巻き込まれ抗いながら、「現実」を生き抜いていく。誰しもが直面する可能性がある「明日」のために。pixiv (イラスト・漫画・小説の投稿や閲覧が楽しめる SNS) の投稿から人気を博した 30 回泣ける介護漫画です。

広島市清和・日浦地域包括支援センター 永見 悠騎



第9回の輝きさんは



漫画家

たかの 歩さん

■介護士から絵の道へ

以前は介護老人保健施設ベルローゼにて 8 年ほど介護士として働いていました。私は絵が得意でしたのでデイケア勤務の頃、絵の描き方を提供するアクティビティをさせて頂いており、退職して絵の道に進んだ後、絵の講師として引き続きデイケアへ。

退職のきっかけとなったのは母が亡くなった事です。母が亡くなるまでの半年間はとても濃密で奇跡と呼んでいいような体験をしました。この体験は QOL とは何かを問いかける大切なものでしたので、この体験を何とか世に出そうと考え「漫画」を選択しました。

デイケアで講師をしながら家では漫画を作画し、周囲のご協力を得ながらまずはネットで投稿するに至りました。

■紆余曲折の結果「さくらと介護とオニオカメ!」を出版する事に

漫画のネット掲載を見て気に入って下さった編集長から声を掛けて下さり、連載、そして書籍化される事になりました。実話を基にした物語ですが、母と私をそのまま描くのは美化する描き方になってしまいますので、性格が異なるキャラクターを作り、そのキャラクターに母と私が体験した事を追体験して貰うストーリー展開にしています。

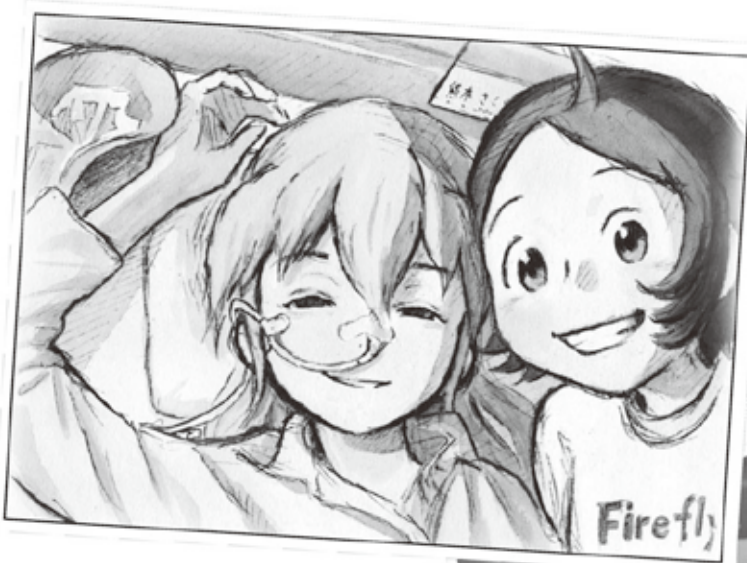
登場する施設はお世話になったベルローゼ。取材も大変助かりました。街並みも広島各所です。施設で学んだ事、退職して外から見る介護の事、緩和ケアの事、生きる事、亡くなるという事。私なりに「QOL とは何か」をテーマに 1 話 1 話丁寧に描いています。

これらの物語が皆さんの人生の記憶の片隅に残り、野火のように広まってくれたら母も喜ぶ事だろうと思います。



私のまわりの輝きさん

「QOL」とは何かを考えながら物語を紡ぐ



さくらと介護と
オニオカメ!

第一話で出てくる
一枚の写真は
実際の写真を基に
描いています。



舞台は広島
実際の施設や病院が登場

現在、第3巻まで出版

描かれている事
これから描いて行く事

- 介護と緩和ケア
- メメント・モリ
- インフォームド・コンセントのあり方
- キューブラー・ロスの受容過程とは
- エンゼルケアとグリーフケア
- 普通とは
- 仕合わせとは

人生で必要な何かを
二人のキャラクターが
作者にも教えてくれた
そんな物語...

良かったら読んで下さい



研修報告

令和3年度リーダー研修

『包括的・継続的ケアマネジメント業務における環境整備について』

【日時】令和4年1月14日（金）10時～16時

【開催方法】オンライン（Zoom）

【目的】地域包括支援センターの主任介護支援専門員には、居宅介護支援事業所への支援、環境整備が求められます。複数の課題を抱える個別ケースにおける担当ケアマネジャー、居宅介護支援事業所（主任介護支援専門員）との連携や協働に課題があります。上記課題を解決するために、今研修で紹介する事例の経過に沿って地域包括支援センターの主任介護支援専門員等が行う包括的・継続的ケアマネジメント業務におけるPDCAサイクル（課題抽出、課題の共有、実践、評価）と環境整備の実践について学習し、実践力を向上します。

【受講対象者】地域包括支援センターの主任介護支援専門員およびセンター長またはそれに準ずる人

【内容】

～午前～

講義・演習『包括的・継続的ケアマネジメント業務における居宅介護支援事業所の支援、環境整備について』

講師：広島市三和地域包括支援センター センター長 黒木 勇治

～午後～

講義・演習『事例の共通理解と課題の整理（ICF・エコマップの活用）について』

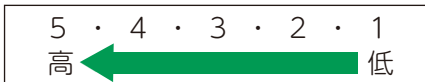
『ICF やエコマップを活用した事例検討・居宅介護支援事業所との連携・協働について』

講師：広島県地域包括・在宅介護支援センター協議会 会長 小山 峰志

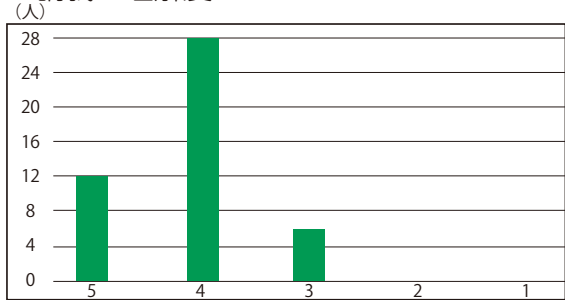
事例提供：広島市瀬野川東地域包括支援センター センター長 鎌倉 直司

広島市瀬野川東地域包括支援センター 小幡 裕典

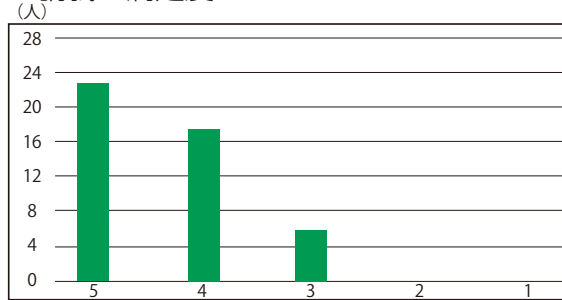
◆アンケート結果／回答者数46人



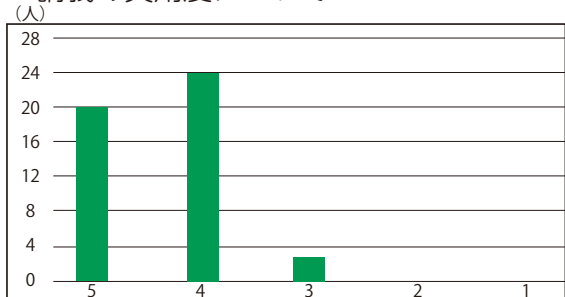
* 講義の理解度について



* 講義の満足度について



* 講義の実用度について



理解度・満足度・実用度
いずれも高い結果が出ており、
好評だった様子が伺えます♪



◆研修受講者の声を一部ご紹介します♪

- ・包括の本来の業務である包括的・継続的ケアマネジメントの環境整備の方法、またケアマネジメント支援について聞き、今後包括内で進めていく方向性が見えた気がしました。
- ・主任介護支援専門員や包括支援センター職員として、ケアマネへの助言や指導について、今まではどうしてもケアマネが感じている課題や問題などに着目し、それについてどうしていくかを考えていくことがほとんどだったと思います。今一度、ケアマネジメントの見直しや振り返りを一緒に行っていくことで、本当のニーズや解決すべき課題など一緒に見つけていけるような体制づくりをしていきたいと思いました。
- ・居宅の中での主任ケアマネとして実務していた経験がありますが、どのように活動していけばよいかあまりわかっていたいなかったように思います。包括の中で主任ケアマネとして今後居宅の主任ケアマネとともに勉強していく機会があればよいと思います。
- ・特に午後の講義では、これまで疑問に思い、答えの出ていなかった課題に対し、ズバリ答えをいただけたような内容でした。気づきを得ることができ、非常に勉強になりました。
- ・事例に関しては小山先生と提供者の質問のやり取りを聞いてとても勉強になった。
- ・事例を考えながら、同じような相談があると思いました。すぐに困難事例と思わず、まず、事業所内で、事例検討をされてみる、事例をまとめるだけでも、気づくことはあると思いました。
- ・包括主任ケアマネとしての役割を再確認できました。より良い地域支援、ケアマネジメント支援には居宅主任ケアマネやケアマネと遠慮なく話ができる関係づくり、ネットワークの構築が欠かせないものだと感じました。
- ・久しぶりに包括職員研修に参加し、とても有意義な時間でした。つい事例に焦点をあててしまいましたが、包括のポジショニングなど再度考えさせられ「うん、わかる!」と共感できたことは大変よかったです。このような包括職員のための研修も必要ですし、居宅の主任CMとの研修も必要だと思います。主任CMとして今後地域でどのように活動していこうか、ヒントをいただいた研修でした。ありがとうございました。
- ・包括支援センターへの相談受付時、主任介護支援専門員として冷静に基本的な判断が行えるよう研鑽を積む必要を感じた。現状の大変さの訴えのみにとらわれがちだが、一つ一つ段階を経ていくと少しずつ解決への道が見えてくるのではと感じた。
- ・今まで自分が受けた研修にはないような内容や事例検討でした。しかし、こういう相談や対応、居宅介護支援事業所との認識や思いのずれってあるよね。と身近に感じながら学ばせてもらうことができました。よかったです。
- ・居宅介護支援事業所との共通テーマも必要だと思いますが、包括支援センターの参加者だけだったので、日頃の業務上で感じる居宅との連携について本音で話す機会になって良かった部分もあります。実務に活かそうと思います。ありがとうございました。
- ・包括支援センターの主任ケアマネとして包括的・継続的ケアマネジメント支援と環境整備について整理して学ぶことができました。個別支援と環境整備についてもヒントがたくさんあった研修だったと思います。良い学びの機会をいただきありがとうございました。
- ・前半の包括の事業計画について、他の包括の計画表など共有画面で見たりするのは新しい試みで参考になり良かったと思う。後半の事例検討についても居宅と包括のそれぞれの動きがよく理解でき有意義でした。
- ・とても現場に即した内容で、日頃の業務を色々イメージしながら聞きました。本町は小さな町なので、大きな市町とは異なると思いますが、毎月4地区で居宅・病院・包括・民生委員・社協・行政で連絡会議を開き、情報と支援状況や住民情報を共有し備えています。ある程度の方向性を確認しておくことで早め早めの対応と協働につながっていると思います。社会資源が少ないため、そういう方向での調整や支援がスムーズにできることがメリットです。”顔の見える関係”が強みになっています。

今年度も研修会にたくさんご参加いただき、ありがとうございました。
来年度も、みなさんに喜んで頂けるよう、研修委員が企画・運営をして参ります!!
たくさんのご参加お待ちしております♪



編集後記

先日、30年前に配属されていたデイで誘導や入浴後の保清等のケアを少しの時間させて頂きました。直接的な「かかわり」は、相談とは違う親近感が湧くことを改めて実感。ここケアの原点ですね。荒木 和美 (広報委員長)

DX、AI、IT、ICT、IOT・・・こんな名称じゃなくてもっと分かりやすい表現にしてくれればいいのに。と編集しながら考えておりました(苦笑)総務省さん、もっと日本人が分かりやすいようにしてください! 永見 悠騎 (広報副委員長)

コロナ感染症はいつまで続くのでしょうか。草花は既にかわいい芽をつけしだいに大きくなっています。もうすぐ春ですね。……………藤井 紀子

春の足音近づいたり遠のいたり。世の中嫌なニュースがあふれていますが、こんな時こそ、人とのつながりが大切だと切に感じます。……………高森 裕美

無病息災を願い邪気払いの呪術、豆まきをしました。コロナに負けずまた1年元気に過ごしたいと思います。みなさまにも、よい一年でありますように。

……………長谷川 忠弘

年明けからコロナオミクロンの大流行で窮屈な生活が続いています。春と一緒に、外出や外食がしやすい日々がやってきたらいいのに…と願うばかりです。

……………丸光 陽子



広島県地域包括
在宅介護支援センター協議会
ホームページ

<https://shienkyou.jp/contents/index.php>



広島県地域包括 在宅介護支援センター協議会

検索



QRコードを読み
とってください